

作目名	茶
-----	---

<露地栽培>

○技術体系設定の前提条件

(1)対象地域

西南濃の山麓地帯及び中濃、東濃、飛騨の一部の中山間地帯

(2)立地条件

①気象条件

年平均気温 12.5℃以上、月最低気温－9℃以上で、年間降水量 1,500mm 以上(生育期 1,000mm 以上)気象災害(凍霜害、寒干害)が少ない地帯であること。

②ほ場条件

- a 南、東南方向のほ場で気象災害の少ないこと。
- b 土壌は排水のよい埴壤土で地力の高いこと。
- c うねの方向は平地では南北うね、傾斜地では等高線うねを基本とする。
- d ほ場整備が実施され、資材の搬出入用道路が設置してあること。

③開園法

山麓又は山間傾斜地での開園は、環境保全的かつ省力多収を可能とするような造成法をすすめる。機械化栽培体系の導入が可能となるよう、ほ場形態、傾斜度等を最適化する必要がある。

- a 山成り開こん畑 5～10度の傾斜地をそのまま利用する。
- b テラス式整備 15度程度までの傾斜地では、レール走行式や乗用型管理機導入を前提とした標準区画に準じて造成する。防災面に留意する。

④機械化に対応したほ場条件

方式	傾斜度	うね方向	うね長	枕地	樹高	土壌
乗用型管理機	5度以下	—	50 m以上	3 m	45~90cm	有効土層 60cm 以上
レール式管理機	12度以下	等高線うね	30～50	1.5	70以下	—

(3)植栽法

①植栽法

様式	うね間	株間	条間	10 a あたり本数	備考
1条	165cm	30cm	— cm	2,020 本	中山間地帯
	180	30	—	1,850	平坦地帯
複条	180	45	30～45	2,460	千鳥植

②樹齢別目標収量(10 a 当り kg)

樹 齢	1年	2年	3年	4年	5年	成木
目標収量	—	80	200	600	1,000	1,500

(注)目標収量は、秋番茶を含めての総合計

○生育過程

①西南濃地帯の山麓

月・旬	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	備考 (品種)
	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	
露地栽培	<input type="checkbox"/> 春— <input type="checkbox"/> 春- <input type="checkbox"/> 春— <input type="checkbox"/> 夏— <input type="checkbox"/> 夏— <input type="checkbox"/> 秋- <input type="checkbox"/> 秋— <input type="checkbox"/> 秋												(やぶきた)

②中濃、東濃、飛騨の一部の中山間地帯

月・旬	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	備考 (品種)
	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	
露地栽培	<input type="checkbox"/> 春— <input type="checkbox"/> 春- <input type="checkbox"/> 春— <input type="checkbox"/> 夏— <input type="checkbox"/> 夏— <input type="checkbox"/> 秋- <input type="checkbox"/> 秋— <input type="checkbox"/> 秋												(やぶきた)

☒ : 摘採・整枝 □ : 施肥 ☞ : 萌芽期

○土づくり・施肥

①物理性の改良目標

項目	改良目標	備考
有効土層	60cm 以上	根が容易に入りうる土層
ち密度	硬度計の読み 20mm 以下	22mm では根が入りにくい 25mm 以上では根は入らない
仮比重	粗粒質 1.5 以下 中粒質 1.2 以下 細粒質 1.0 以下	比重 1.0 は水と同じ重さ 有機物を入れると小さくなる
粗孔げき	15% 以上	非毛管孔げき (2mm 以上) で降雨 24 時間後の土中の空気量
透水係数	10^{-4} cm / 秒以上	1 日当たり 8.6cm 以上の透水
有効水分量	50mm 以上	m ² 当たり 50l 以上の貯水量 茶樹蒸発量の 10 日分
地下水位	1.5 m 以下	不透水層は 1 m 以下

②化学性の改良目標

項目	改良目標	備考
pH	4.0～5.0	苦土石灰で矯正する
塩基置換容量	20me 以上	
置換性 CaO	150mg/100g	
置換性 MgO	30mg/100g	
置換性 K ₂ O	40mg/100g	
有効態 P ₂ O ₅	30mg/100g	
EC	1mS 以下	

③家畜ふん尿施用基準(10 a 当たり、t)

家畜名	種類	連年施用	単年施用
にわとり	乾燥	0.3	0.5
	発酵	0.5	0.8
	堆肥	0.5	1.0
豚	乾燥	0.5	1.0
	きゅう肥	0.5	1.0
	生	1.0	2.0
牛	乾燥	0.8	1.5
	きゅう肥	1.0	1.5
	生	1.0	2.0

④施肥基準

a 西南濃地帯

施肥成分	本 ぼ (10 a 当たり成分量 kg)					
	総 量	基 肥 (秋肥)	追 肥			
			春 肥	芽出し肥	色付け肥	夏 肥 1
窒 素	55	17	21	6	4	7
りん 酸	27	10	8	5	—	4
加 里	32	15	8	3	—	6

b 中濃、東濃、飛騨の一部の中山間地帯

施肥成分	本 ぼ (10 a 当たり成分量 kg)						
	総 量	基 肥 (秋肥)	追 肥				
			春 肥	芽出し肥	色付け肥	夏 肥 1	夏 肥 2
窒 素	55	9	21	5	4	6	10
りん 酸	28	7	17	1	—	1	2
加 里	28	8	15	1	—	2	2

⑤樹齢別施肥基準(10 a 当たり、kg)

a 西南濃地帯

樹 齢	1	2	3	4	5	成 木
目標収量	—	80	200	600	1,000	1,500
窒 素	20	28	40	50	55	55
りん酸	10	13	18	23	27	27
加里	10	16	22	28	32	32
苦土石灰	—	—	50	80	80	80

b 中濃、東濃、飛騨の一部の中山間地帯

樹 齢	1	2	3	4	5	成 木
目標収量	—	80	200	600	1,000	1,500
窒 素	23	32	39	51	55	55
りん酸	12	14	18	21	28	28
加里	12	13	17	21	28	28
苦土石灰	—	—	50	80	100	120

[施肥設計及び施肥上の注意点]

- a 基肥、春肥の配合肥料は緩効性肥料(LP尿素)入りを使用し、土壤中の窒素成分の維持が容易にできるようにする。
- b 基肥は越冬までの貯蔵養分の充実に使う。平坦地では肥切れの状態越冬しないように注意し、適宜追肥を考える。
- c 春肥は一番茶品質と二番茶収量向上を重点に考える。最初は、春先の土壤中の窒素分をたち上げるために速効性の肥料を使用する。その後は緩効性肥料入り配合、I B化成(降雨に対応した肥効を期待する)、有機肥料(種粕)といったように分施し、一番茶摘採時に土壤中の窒素分がピークとなるようにもっていく。
- d りん酸、加里は基肥、春肥に80%以上を施用する。
- e 色付け肥、夏肥は速効性窒素肥料を主体に用い、特に摘採前の色付け肥はアンモニア態窒素を利用するのが茶のうま味を増す施肥法である。
- f 窒素肥料は1回の施用量をレキ質土では成分で10kg程度、その他の土壌では15kg以下とし、濃度障害を防ぐ。
- g 降水量が多い年は、一番茶摘採前の施肥に特に注意する。一度に100mm以上の降雨があった場合は、土壤中の無機化した窒素はほとんど流亡するため追肥の必要がある。